〈日本組織適合性学会誌 *MHC* の投稿規定〉

1．投稿規定

1.1．原稿様式

提出原稿がそのまま電算写植で印刷できるように，原稿は全て，コンピューターのフロッピーディスクとA4サイズでプリントアウトしたものの両者を提出する．一般的なワープロソフトを使用し，ソフト名を明記する．字体，サイズ，行の字数，行間，などの体裁は自由とする．また，図表については，写植でそのまま掲載できるものを提出するが，挿入箇所を本文に指定する．図については天地を明示する．印刷の際に，縮小または拡大する場合があるので，考慮すること．また，図表の題や説明はワープロで，本文とは別頁に添付する．

1.2．原著論文

会員からの投稿を原則とするが，編集委員会が依頼することもありうる．日本語，英語を問わない．最初の一頁はタイトルページとし，タイトル，著者名，所属，脚注として代表者とその連絡先を記す。タイトル，著者名，所属は次の様式にしたがう．

Serological and nucleotide sequencing analysis of a novel DR52-associated DRB1 allele with the DR'NJ25' specificity designated DRB1*1307.

Toshihiko Kaneshige[1)], Mitsuo Hashimoto[2)], Yayoi Murayama[1)], Tomoko Kinoshita[2)], Tsutomu Hirasawa[1)], Kiyohisa Uchida[1)], Hidetoshi Inoko[3)]

1) Shionogi Biochemical Laboratories, Shionogi Company, Osaka, Japan
2) Kidney Transplantation Center, Hyogo Prefectual Nishinomiya Hospital, Hyogo, Japan
3) Department of Molecular Life Science, Tokai University School of Medicine, Kanagawa, Japan

HLA class II の DNA typing と MLC

能勢　義介[1)]，稲葉　洋行[1)]，荒木　延夫[1)]，浜中　泰光[1)]，阪田　宣彦[1)]，土田　文子[2)]，辻　公美[2)]，成瀬妙子[3)]，猪子　英俊[3)]

1) 兵庫県赤十字血液センター，検査課
2) 東海大学医学部，移植免疫学
3) 東海大学医学部，分子生命科学

内容は，二頁目よりはじめ，要約（Summary），はじめに（Introducution），材料と方法（Materials and Methods），結果（Results），考察（Discussion），参考文献（References）の順に記載する．また，要約の末尾に日本語で5語以内のキーワードを加える（英文の場合には英語のKey wordsを加える）．脚注は適宜，設けてもよい．日本語で投稿の場合には，末尾に英語のタイトル，著者名，所属(様式は上述に従う)，英語の要約と英語で5語以内のKey wordsをつける．枚数に特に指定はないが，速報的な短報(全体で，2,000 ～ 3,000 字，出来上がり A4 版で2～4枚程度）を中心とする．もちろん，フルペーパー（full paper）も歓迎する．なお，参考文献（References）の記載については，下記1.5を参照すること．オリジナル1部にコピー3部を添えて，編集長宛(下記3参照)に送付する．

1.3．総説，シリーズその他

編集委員会からの依頼を原則とするが，会員からの投稿も大いに歓迎する．日本語を原則とする．タイトル，著者名，所属は上記1.2.の通りにしたがい，要約と要約の末尾に日本語で5語以内のキーワードを添える．その他の体裁は自由とするが，構成がいくつかの章，節などから成る場合には，次の番号に従い，適当な見出しを添える．

1.　2.　3.　4.　.....
　1.1.　1.2.　1.3.　1.4.　.....
　　1.1.1.　1.1.2.　1.1.3.　.....

脚注は適宜，設けてもよい．なお，参考文献（Refer-

ences）の記載については，下記1.5.を参照すること．

1.4. 校正

校正は編集委員が行い，特別な場合を除き，執筆者は校正を行わない．

1.5. 参考文献

参考文献は，本文中に数字で，例えば (3)，の様に表示し，末尾にまとめて，次のようなスタイルで記載する．ただし，著者名，または編集者名は，筆頭3 名まで記載し，以下は省略する．

1. Kaneshige T, Hashimoto M, Murayama A, *et al.* : Serological and nucleotide sequencing analysis of a novel DR52 - associated DRB1 allele with the DR'NJ25' specificity designated DRB1*1307. *Hum. Immunol.* **41** : 151-160, 1994.
2. Inoko H, Ota M : *Handbook for HLA Tissue - Typing Laboratories* (eds. Bidwell J, Hui KM), PCR - RFLP. CRC Press, Boca Raton, 1993 ; p. 1-70.
3. 能勢義介，稲葉洋行，荒木延夫ら：HLA class II の DNA Typing と MLC，輸血，**39**: 1031-1034, 1993.
4. 猪子英俊，木村彰方：岩波講座分子生物科学11巻，生物体のまもりかた（本庶佑編），自己と他の識別，岩波書店，東京，1991; p. 129-194.

2. 別刷

原著論文については，別刷は有料とする．その費用は部数，頁数による．

3. 原稿送付先

〒259-11 神奈川県伊勢原市望星台
東海大学医学部 分子生命科学系遺伝情報部門 日本組織適合性学会誌 MHC
編集長 猪 子 英 俊
TEL: 0463-93-1121 内線2312
FAX: 0463-94-8884

編集後記

このたび、東京医科歯科大学に教授として着任されました木村彰方先生に、早速この4月より編集委員をお願いしました。HLAに限らず、多方面の分野にご造詣の深い木村先生のお力添えで*MHC*をますます充実した内容にしたいと思います。

本号は第5回日本組織適合性学会大会のプログラム、抄録などを掲載していますので、学会の参加者は必ず本号をご持参下さい。

本号より投稿規定の一部を改訂致しました。ご投稿の際には内容をよく確認の上、規定に沿った形式でご執筆をお願いします。会員の皆様のご投稿をお待ちしています。(猪子英俊)

HLA領域内の遺伝子群の多くは著明な遺伝的多型性を示し、各座位の対立遺伝子間には強い連鎖不平衡が認められる。HLA研究に携わっている者としては当然のように受け取っている事実であるが、他の領域の遺伝子を調べていると、アミノ酸置換を伴う多型がいかに少ないか、また強い連鎖不平衡の成立することがいかに少ないかということを実感させられる。

本誌に記載されているように、新たなHLA-A対立遺伝子やTAP対立遺伝子群が次々と見出されている現実に直面すると、「なぜHLA領域の遺伝子群に多型性が存在するか？」という疑問への解答は「多型を見つける研究者がいるから」ということにもなりかねない。HLA-DRB1対立遺伝子数が100を越えた時、DNAタイピング技法の発展がこの対立遺伝子数の増加に拍車をかけていると思ったが、ここ1～2年の間のHLA-B対立遺伝子数の増加を見るとその感を強くする。

先日、第12回国際HLAワークショップ・カンファレンスの際にHLA命名委員会のSteven G. E. Marshに会ったが、新たなHLA-B対立遺伝子を日本人集団に少なくとも5種確認したという話をした折りの彼の反応は“Stop it. There are enough alleles.”であった。次々と報告されて来る新たな対立遺伝子（特にHLA-DRB1とB）に忙殺されている由である。「Sequenceを確認しない限り新たな対立遺伝子として命名しない」というのが第11回国際HLAワークショップ後のHLA命名委員会で決定された方針であるが、この方針に沿ったために、逆に血清学的な特異性が明確でない対立遺伝子の数が増加しており、塩基配列の相同性のみから命名（グループ分け）せざるを得ない以上、血清型とDNA型の対応にズレが生じている。

今後クラスI遺伝子のDNAタイピングがより広く行われるようになると、当然の結果として新たな対立遺伝子がさらに見出されることになり、また抗原ペプチドを結合する細胞外ドメイン以外の多型やプロモーターあるいはイントロン内の多型を含めると、現状の5ケタ表示では到底追い付かず、6ケタ以上の表示となる可能性が高い。翻ってみれば、特に骨髄移植の際のドナー選択のようにHLA型の決定が重要な場合、どこまでのHLA型を区別すればよいのかという現実の問題に突き当たるわけである。では、完全にHLA型を一致した場合に果たして移植は100%成功するであろうか？　HLAが移植におけるmajor抗原であることは論ずるまでもないが、minor（major minor?）抗原（これもアミノ酸置換を伴う遺伝子多型の反映と考えられる）の存在も考慮しなければならない。HLAを研究する者は、とにかくHLAを中心に据えて、その遺伝的多型性を徹底的に明らかにする方針を貫くべきであると考えるが、やはり血清学を含めた機能的多型にも思いを馳せなければならない。

そもそも遺伝子多型性の存在する生物学的な意義は何であろうか？　HLA領域遺伝子群のように著明な遺伝的多型性を示す遺伝子における多型の機能的な存在意義は何であろうか？　HLAのような特異な多型を示す遺伝子が多くはないという事実は、HLA多型の存在は、研究している者に生活の糧（職）を与るためでも、悩ませるためでも、ましてや我々をからかうためでもなく、そこにはやはり進化上意味があるものだろうと思わせるのだが、それも研究している者の自己満足であろうか？(木村彰方)

MHC

Major Histomcompatibillity Complex

Official Journal of The Japanese Society for Histocompatibility and lmmunogenetics

1996年8月26日発行　3巻1号，1996

定価　2,000円

発行　日本組織適合性学会（会長　吉田孝人）

編集　日本組織適合性学会編集委員会（編集担当理事　猪子英俊）

平成8年7月24日　学術刊行物認可

日本組織適合性学会事務局（事務会計担当理事　十字猛夫）

〒150　東京都渋谷区広尾4-1-31　日赤血液センター内

印刷・港北出版印刷㈱

〒150　東京都渋谷区渋谷2-7-7